



お江戸舟遊び瓦版 1147号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

あらかわ学会 年次大会 2025

あらかわ放水路竣工百年の想い,100年の未来

日時: 26年2月15日(日) 10:30~18:00

所: 綾瀬プルミエ 第2洋室

開会挨拶: 大平一典(あらかわ学会理事長)

荒川の下流部は、隅田川の放水路として開削された人工の川です。ここ数年、日本各地で過去の経験したことがないような水災害が発生しています。今後の100年は、自然の脅威との厳しい戦いが予想されます。国土交通省の廊下ある「流域治水 by all」のポスターのように、私たちの主体的な参画が求められています。

【論文発表】

○有間エリア水源林保全プロジェクト 伊藤智明(飯能市森林づくり課林政アドバイザー)

・ 生物多様性の復元、水源涵養、土砂流出防止機能回復を目的に、森林の回復を目指し実施中。

○足立区小中学校に植樹された「里帰り桜」の現況調査 鈴木誠(東京農大グリーンアカデミー)

・ 1980年台にアメリカから寄贈された「里帰り桜」を活かしたまちづくりの現状を調査した。

○足立区都市農業公園の滝匂桜の調査 樋口恵一(足立区OB)

・ 足立区都市農業公園の滝匂は、駿河台匂、明月でもなく、荒川堤由来の滝匂と考えられる。

○子供たちと自然をつなぐ体験活動プロジェクト 多田恵、堂本泰章(埼玉県生態系保護協会)

・ 荒川中流の江戸川区立小松川小学校のカワナデシコ増殖活動を体験活動として展開している。

○関東地方におけるコウノトリの観察 川島秀男

(鴻巣こうのとりを育む会)・ 渡良瀬遊水地人工巣塔

上でコウノトリは、6年連続で3羽のヒナ誕生。

○川で泳ぐー那珂川遠泳大会から荒川遠泳大会へー

岡本次郎、泉治伸(巣鴨中学校・高等学校)

・ 100年前頃、館山臨海学校に始まり、那珂川遠泳、荒川遠泳と繋がったが、残念だが昨年は中止に。

○板橋戸田緑地 中規模自然地・生物生態園の調査検証 清水裕子、清水孝章(あらかわ学会)

・ オギやアレチウリ等調査から草刈り管理方法と植生の適切な管理方法が見えてきた。

○小松川自然地におけるマイクロプラスチックの影響解析 村上和仁他(千葉工大生命科学科)

・ マイクロプラスチックは自然分解されず半永久的に残存する特徴があることから、小松川自然地のヤマトシジミとアシハラガニの食物連鎖を実験し、生態系崩壊に繋がらないか研究を進めている。

講演: 「流域治水ー荒川上流の取り組み」 荒川上流河川事務所流域治水課 工藤愛樹専門官

・ [荒川水系流域治水プロジェクト](#) | [荒川上流河川事務所](#) | [国土交通省 関東地方整備局](#)

○荒川放水路通水100年記念事業を振り返って 秋山賢(荒川下流河川事務所地域連携課)

・ たくさんの記念事業を通じ、「次の100年の未来」を考える切っ掛けを作ることができた。

○国際憲章 Swimmable Cities! 荒川遠泳大会の活動意義 三井元子(あらかわ学会)

・ 23,24年と荒川遠泳大会を開催し、東京でも Swimmable Cities への可能性を見出せた。

○荒川下流土地利用・地域危険度の研究 坪井朔太郎(帝京大学・人と防災未来センター)

・ 2009年~2021年土地利用変化から火災危険度の検討を行った。今後洪水災害リスクと続けたい。



- 荒川流域防災住民ネットワーク in 足立区 水越雅子・三井元子（荒川流域防災ネットワーク）
 - ・ 3・11以降一時的に防災の意識が高まったが、荒川流域の防災意識を足元の共助から高めたい。
- 「マイ・タイムライン逃げキット！」実践について 大塚克也（水辺のクリエイターズ）
 - ・ 河川の氾濫を余裕を持って逃げるために国土省の「逃げキット」の広がりが必要である。
- 2025年世田谷豪雨災害と災害ボランティア活動 清水孝章（荒川流域防災プロジェクト）
 - ・ 水害は、ハードの設備と運用次第で被災状況に差が出た。盛土や止水版で水を止めると、行き場のなくなった水は隣家に及ぶ等課題は大きく、予測精度や設備の遠隔操作などの技術に期待したい。
- 戦時に残された工作機械から葛飾区の工業都市化を学ぶ 古川慎平・小田幸子（自由学園最高学部）
 - ・ 学園に残された工作機械・旋盤から製造元の葛飾区の工業都市化を読み解くことができた。
- 海拔ゼロメートル地帯の集合住宅の減災の提言 後藤哲（江東マンション在住）
 - ・ 災害時に電気・水・通信などの同時停止などの抜本的対策とともに、見える化したマニュアルが必要だ。世界的にも首都のマイナス地域はなく、抜本的な防災計画が必要である。
- 江戸川新庁舎構想から見えてきた「荒川氾濫」 中瀬勝義（江東5区マイナス地域防災を考える会）
 - ・ 江戸川区の新庁舎は、荒川氾濫（水害5m、高潮10m）を想定し、水害と地震に耐える「これからの100年を支える日本一の防災庁舎」を構想している。高潮10m対策として、新庁舎下部は駐車場棟とし、その上に免震層が乗り、その上に事務棟が乗る構造になっている。



- ・ このことから江戸川区は水害を5m、高潮を10mと想定していることが判明し、江東区も同様の認識と理解される。江東5区広域避難推進協議会のハザードマップによると「ここにはダメです」「浸水のおそれがないその他の地域へ」と明示されている。1階や地下階にあるスーパーやコンビニに依存する住民の食生活は崩壊危機で、地下鉄は大変危険だ。対策案は水害避難支援システム、マイナス地域防災研究所、根本的解決策の一つ「ゼロメートル地帯湿原プロジェクト」が挙げられ、安心安全な明るい未来を目指し、若者を含め自分事としての検討が必要となっている。



- 多摩川河川整備計画市民案 山道省三（多摩川流域市民ネットワーク）
 - ・ この400年の間、多摩川は住民本位の多大な人為圧を受けてきたが、長い間の環境ボランティアの経験からは、これからは生物の生存に優しい自然の柔らかい構造への対応が望まれる。
- フリーディスカッション「流域治水と市民の役割」
 - ・ 荒川上流柳川河川課長: 水害が大型化している。生命を守るには逃げるのが大切。決壊が心配。
 - ・ 従来のコンクリートなどによるハードから自然に優しいソフトな水害対策の発想の転換が必要。
- 所感: 文化や自然・環境に防災のあらかわ学会に参加し、「新庁舎構想から見えてきた荒川氾濫」を発表させて頂いた。安心安全なマイナス地域防災を官民連携で明るい未来創出！を。(文責 中瀬)